

研究課題	学校教員に求められる素養としての外国人児童生徒教育に関する省察的探究		
氏名	米本 和弘	所属	教職大学院・教育実践創成講座
		職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ - 受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 近年、公立学校に在籍する外国人児童生徒等は増加傾向にあり、日本語指導に関しては制度や環境の整備が進んでいる。一方で、多様な背景を持つ子どもを取り残さないということを考えた時に、日本語指導担当教員だけではなく、関わる全ての教員が外国人児童生徒教育に関する基礎的な理解を有することが望ましいと言えるが、全ての教員を対象とした素養に関する議論は緒に就いたばかりである。そこで、本研究では、現職教員及び学卒生を対象とする申請者自身の実践を通じ、1)学校教員に求められる素養としての外国人児童生徒教育とは何か、2)その素養を涵養する機会はどうのように創出できるかを明らかにすることを目的とした。 具体的には、本研究では、申請者を含む複数教員で担当した専攻科目「子ども理解と支援」(秋学期、全14回)のうち、申請者が担当した4回の授業を対象とした。これら4回の授業では、外国人児童生徒等、ジェンダー、貧困を題材に、受講者自身の経験や価値観、考え方を講義とグループワークを通してふり返り、それぞれの教育実践の再検討や教育課題解決に向けた取り組みが構想できることを目標とした。受講生は異なる専門領域を持つ計163名で、このうち同意が得られた学生の授業時のノートと成果物、申請者の記録、及び授業後に実施したインタビューをデータとした。 収集したデータからは、専門領域に関係なく、多くの受講生が自身の直接的な経験などから4回の授業で扱った題材を身近で重要な教育課題として捉えていることが窺われた。中でも外国人児童生徒等に関しては、各専門領域の授業の中で、子どもたちが抱える困難や教員の働きかけ、指導や支援の工夫などを検討することを通して、これまでの経験に基づく漠然とした課題意識がより具体的になったことが指摘できる。その結果、それらの課題意識を明確に言語化したり、働きかけや工夫をより具体的にイメージしたりできるようになるなど、指導・支援の実現可能性が高まったと言える。さらに、特別支援や性の多様性など、他の教育課題と外国人児童生徒等の共通点に気づくことにより、指導・支援に対する自信へとつながっていることが示唆された。 ただし、得られたデータからは、現状の枠組みの中での学習活動に参加できるようになることを目指す上で必要な外国人児童生徒等への指導・支援という意識が受講生の中に強固に存在していることも浮かび上がってきた。このような考え方は各専門領域の授業の中での指導・支援の方法を検討する際に特に顕著に現れ、子どもたちが持つ多様な背景を理解し、抱える困難には共感を示すものの、あくまでも指導・支援そのものの検討に留まり、学習内容の問い直しや規範への働きかけなど、批判的、創造的な構想とは言い難い部分が課題として残った。 今後は、このような他者に共感し、真摯に問題意識と向き合う態度を生かしつつ、創造的かつ先導的に教育課題に取り組むことができるよう、申請者が実施する授業において議論や理解をどのように深めていくことができるかを検討していく。			
【研究成果発表方法】 学会発表（予定） ・ 米本和弘（2024）「学校教員に求められる素養としての外国人児童生徒教育に関する基礎的探究」異文化教育学会第45回大会 また、成果をまとめた論文を学会誌に投稿予定である。			

発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。